

『釜石出身の方々の生活と意識に関するアンケート』と『釜石市民の住民意識に関する調査』について



永井暁子（日本女子大学人間社会学部）

この10月号から6回にわたり釜石出身の方々と釜石にお住まいの方々に協力いただいた二つのアンケート調査で分かったことを紹介していく。まずは、今号でこの二つの調査の内容について説明したい。

調査の概要

釜石出身の方々に、ご協力いただいた『釜石出身の方々の生活と意識に関するアンケート』（以下、**同窓会調査**）は、釜石南高校・釜石北高校・釜石商業高校・釜石工業高校の一九五六年三月卒〜一九九五年三月卒の卒業生のうち、任意の16年分の全卒業生（名簿上にお名前がある方）九二四一人を対象としたものである。調査は二〇〇七年一月から三月に「郵送配票回収法」という方法で行い、二、四八九人（有効回収数）の方からご返送いただいた。有効回収率26・9%であり、同種の調査と比較しても高い回収率であった。主な調査項



Profile ながい・あきこ

1965年生まれ。
日本女子大学人間社会学部准教授。
専攻は家族社会学、家族福祉政策論、女性福祉論。主な著書は『対等な夫婦は幸せか』、『バランスのとれた働き方』など。

目は、高校を卒業してからの仕事や家族形成、生活意識、地域コミュニティとの関わり、地域移動である。一方、『釜石市民の住民意識に関する調査』（以下、**市民意識調査**）は、住民基本台帳から無作為に選ばせていただいた釜石市にお住まいの20歳以上75歳以下の方々である。二〇〇八年一月から三月に同じく郵送配票回収法によって行なった。四、〇〇〇人に発送し、一、四八五人（有効回収数）の方からご返送いただいた。有効回収率37・1%と、こちらも郵送法としてはとても高い回収率である。市民意識調査の主な調査項目は、釜石での仕事や家族形成、生活意識、地域コミュニティとの関わり、地域移動である。

二つの調査の特徴

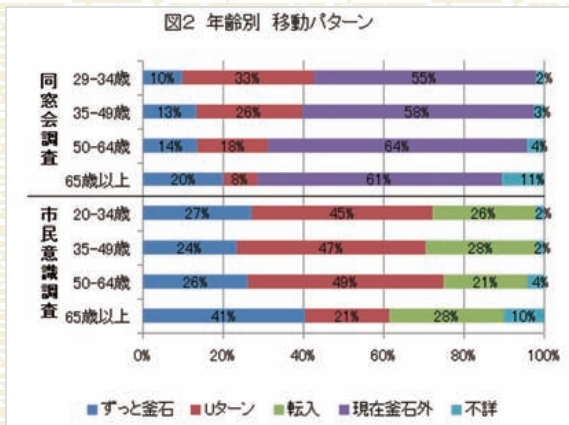
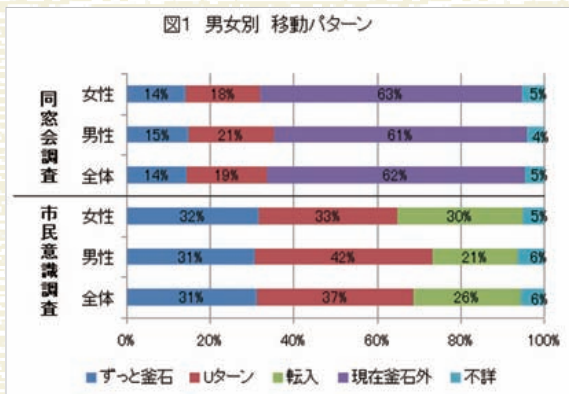
同窓会調査の回答者の方々の年齢構成は、29〜34歳6%、35〜49歳27%、50〜64歳51%、65歳以上16%、

アンケート調査班

玄田有史 (東京大学社会科学研究所 教授)
 永井暁子【調査責任者】(日本女子大学人間社会学部 准教授)
 石倉義博 (早稲田大学理工学術院 准教授)
 西野淑美 (首都大学東京都市教養学部 助教)
 大堀 研【調査事務局】(東京大学社会科学研究所 助教)

不詳0%である。市民意識調査では、20〜34歳19%、35〜49歳16%、50〜64歳29%、65歳以上35%、不詳1%である。市民意識調査では同窓会調査ではとらえられなかった、転入した人、20歳代の人、65歳以上の人も対象となっている。

次に、二つの調査の特徴について述べたい。これまで、同窓会のメンバーを対象とした同窓会調査、卒業生を対象とした卒業生調査というのは、ライフコース研究や若者の教育と職業の研究などの関心のもとに、また、地域移動の研究というのは、Uターン、Iターンなどの動向を踏まえた地域研究などの関心のもとに



行われてきた。これらを組み合わせたい調査研究という意味で、この二つの調査はとても貴重な調査である。さらに、特徴的であるのは、この二つの調査をほぼ同時に実施できたことである。一つの地域で全ての高校の同窓会を対象にしたことも前例がほとんどなく、また、その地域で時期を経ずに市民に対する調査を行ったことは、これまでの日本の研究では、私の知る限りではほかにない。調査というのは、調査をする側がやる気があってもできるものではない。受け入れてくれる環境なくしては、調査は実施できないのだ。

釜石市の皆様、各高校の同窓会の

皆様のご協力に、あらためて心から感謝を申し上げます。

調査から見えること

今号では、この調査の特徴でもある地域移動についてご紹介する。実際には複雑な移動経路をたどっているが、「ずっと釜石」「Uターン」「転入」「現在釜石外」と単純にパターン化して説明していこう。同窓会調査をみると、高校卒業後に地元自治体から引越したことがない「ずっと釜石」14%、卒業後釜石から一度は他の自治体に転出したが現在は戻って来ている「Uターン」19%、卒業後のどこかの時点で釜石を離れ

たままの「現在釜石外」が62%である。転出していった人が約6割を占め、このような傾向に男女による違いはあまりみられない(図1)。市民意識調査では、中学卒業後に釜石市から引越したことがない「ずっと釜石」が31%、「Uターン」37%、中学卒業時には釜石市以外に住んでいた「転入」が26%である。男女による違いは、「Uターン」と「転入」の割合の違いにある。現在釜石にお住みの方のうち、男性の約4割が「Uターン」、女性の約3割が「転入」である。「Uターン」組の男性が女性を結婚して釜石に連れてきたということが考えられる。

年齢別に同窓会調査をみると、若い人ほど「ずっと釜石」が減っている(図2)。しかし、転出して釜石外で生活を続けるのではなく、「Uターン」組となっている。市民意識調査でみると、その傾向は明確にあらわれていて、64歳以下の人たちの間で「ずっと釜石」が減り、「Uターン」が増えたということが分かる。これは、高学歴化や産業構造の転換などと関連をしている。

11月号からは、いよいよ多様なテーマで具体的な調査結果を掲載するので、ぜひご期待いただきたい。